



# 松勤だより

第 66 号



## 青木ヶ原富士樹海・

### 洞窟探検ツアー



リュウズ(同)

大野直史

夢を実現するために青木ヶ原富士樹海・洞窟探検ツアーに参加した。ここはオウム真理教麻原彰晃氏の第七サティアンが存在した付近である。世界的に有名な自殺の名所だとは知っていたが、そこにはとても美しい世界が待っていた。

ガイドの栗林さんは樹海で「ブラタモリ」のタモリさんのガイドとして同行し、マツコ・デラックスさんの「月曜から夜ふかし」でコンパス（方位磁針）が一切使えないという都市伝説について取材をされた有名な樹海ガイドである。本業は東京出身の写真家で、富士山が噴火する写真を撮影するために東京から移住し、樹海に家を購入し住んでいる69歳の男性。

一緒に乗車している車の外を見ると樹海沿いの道路には乗り捨てたバイクが放置され、それを見て「一昨日、バイクの所有者の遺体が樹海で発見されたよ。ここでは度々、人が死んでいるよ。」と普

通に話す。また、これまで熊に3度遭遇し「どの熊も逃げて行っちゃうんだよ。いつか熊と闘いたい。そのために毎日、筋トレをしている。そして、戦いの証として自分の顔に傷をつけたい。格好いいでしょ？」と平気で話す。

樹海に到着し、雨上がりの樹海に入っていくととても空気がおいしい。木が虫を寄せ付けないために発している成分（フィトンチッド）があり、それを人間が吸い込むと体が元気になるそう。そして、樹海を何十分も歩き、疲れなんて感じない何ともいえない気持ちになる。

その後、洞窟に到着し、ガイドの栗林さんが話す。「洞窟に入るといつ崩れてもおかしくないよ。覚悟はできている？富士山は活火山で、洞窟内の壁も落ちているし、届出はしているけど、入口がふさがったら1ヶ月程はここで暮らさなきゃいけないよ。」と。なんと最後の洞窟は市と町に許可をもらわないと入っていけない、一般の人が入ることができない特殊な場所らしい。

樹海の下には100個以上の洞窟があり、今回は3つの洞窟に行った。最後の洞窟は全長が約200mあり、冷凍庫のように冷たい氷（氷の宮殿・アイスパレス）があたり一面に存在する。傾斜40度の所はロープを掴んで滑って降りていく。約100mが通常コースであるが、いきなり上級者用の約200mの深さを目指す。窮屈で、暗く、ここで絶対に死にたくないと思う場所のはずだ。人がひとり、入ることができるかどうかわからない所もあり不安と

期待の繰り返し。そして、一番奥には長い年月をかけてできた氷の山がある。壁は音楽室のように音を吸収する構造になっていて、大声を出しても響かなかつた。つまり、助けを呼んでも誰にも聞こえないということだ。もちろん光も入ってこない。試しに1分間ヘッドライトを消してみたが、何も見えない。一切、光のない世界である。そうしているうちに不安から呼吸が荒くなる。そして、ロープに掴まりながら洞窟から脱出したが、そこは心から生きていることを実感することができぬくもりと光に満ちていた。この日は珍しくとても晴れていたようだ。そのため光が目一杯迎えてくれた。

その後、私が先頭で歩いたが、先程まで通ってきた道を見つけることができず迷い、断念し、ガイドの栗林さんに列を変更し誘導して頂いた。途中でキュウイ類の小さな実を食べ、目の見えない座頭虫を見つけ、樹海に生えているキノコのほとんどは毒キノコであることを教わった。また、鹿や猪の足跡を見て自然の生々しさを感じた。そして、山ブドウのツルでターザンごっこ、ブランコ、桂の木はキヤラメル匂いがすることも印象に残った。このほか、猿、蚊、トンボ等がないことも分かった。土がなく腐った木で土壌ができている樹海では水たまりがなくそれらの生物は生きていけないようだ。ちなみに猪はミミズを好み、ハクビシンはナメクジを好むとのこと。

また、コンパス（方位磁針）の誤作動も実験した。それまで普通に動いていたが、地面に置くと急にくるくると回転した。どうやら

鉄の成分が地面にあり、それが影響しているらしい。あの都市伝説は間違っていた事を目撃した瞬間だった。

今回、日常では味わえない体験をしたが、生きていることの素晴らしさや動物の中で人間がなぜ子孫を着実に残しているのかというヒントになった。これからはさらに生きていることに感謝するだろう。